



雄亀滝橋 熊本・美里町 めでたく誕生200歳 長寿の石橋に拍手

会長 上塚 尚孝(熊本県)



1818年架橋の雄亀滝橋(熊本県下益城郡美里町、橋幅3.6m、径間11.8m、
県指定重要文化財) 2016年5月中村まさあき撮影

緩やかな北高南低の地形からなる九州山地の北壁は、1月中旬の寒波襲来で白い幕をかぶった。その中腹から流れ出す柏川(かしわごう)は緑川の一支流。江戸期に肥後・熊本藩砥用(ともち)手永の惣庄屋を務めた三隅(みすみ)丈八は、その柏川から取水するかんがい水路の敷設を企画した。

その柏川用水路が谷を通過する場所に架かるのは今秋、めでたく誕生200歳を迎える「雄亀滝橋(おけだきばし)」(熊本・美里町)。肥後で最初に築造された石造アーチ水路橋である。

水路の工事は1814年に始まった。しかし、深い谷にかかる桶滝(おけだき)付近で作業は難航。ここを関係者は「当惑谷」と呼んだ。下益城郡代を務めた不破敬次郎は、「目鑑橋(めがねばし)」を架けて、その上に用水を流したらよからう」と提案し、技秀でた八代郡野津手永の石工、三五郎を呼び寄せ、工事に当たらせた。

三五郎は評判に違わず、他の石工たちが手こずった硬い石を簡単に割り、支保工の上に輪石を組み、壁石を積んだ。しかし、今でもこの深い谷は、冬季にはかなり日照時間が短くなる。それに、湿気を

含んだ石材はなかなか乾燥しないので、この橋の工事は困難を極めたはずである。

それでも橋は1年余りで竣工し、路面も設けられ、雄亀滝橋は「水を渡し、人や馬も渡れる橋」として誕生した。この工事の見学者の中には、後に矢部手永の惣庄屋となり通潤橋架設に尽力する、若き布田保之助もいたとされる。

橋には、水路橋としての工夫が見て取れる。暗きよに水を流すには、大雨のときなどに設計を上回って流入する水への対策が必要になる。そこで、用水が流入する呑口の前に水量調節口を設け、余分な水を下の谷へ落下させている。また、呑口に金網を張って、用水路に落ちて流れてくる落ち葉などの除去をしやすくしている。

橋を流れる水は今も田畑を潤しており、地元の土地改良区の人たちは当番制で1日に2回、呑口の掃除をしていると聞いている。

雄亀滝橋は、文化14(1817)年8月に着工。翌年の文政元(1818)年9月成就と、熊本藩の住民評価・褒賞記録「町在(まちざい)」に詳しく記されている。

長寿の橋に拍手を贈りたい。

(2018年1月)

中面の案内

2面 「全国石橋サミットinくまもと」開催
5面 「肥後石橋技術者養成講座」

4面 石橋サミットで初めて語ったこと(片寄俊秀)
6面 祝 大瀬橋架設100年

熊本地震からの復興を願い、熊本・山都町で

「全国石橋サミット in くまもと」開催

石橋技術の継承と石橋の素晴らしさを全国にPRしようと「全国石橋サミット in くまもと」が、2017年11月17・18日の2日間、熊本県上益城郡山都町の清和文楽館で開催され、2日間で約300人が参加した。

1日目にパネルディスカッション、2日目は前日の総括報告の後、石橋サミット宣言が採択され、東京大学名誉教授で熊本県立劇場理事長兼館長の姜尚中（かん・さんじゅん）氏の記念講演などが行われた。主催は美里町、御船町、甲佐町、山都町、熊本県宇城地域振興局、上益城地域振興局が参加する「緑川流域広域連携事業実行委員会」。(広報部)

写真提供/同事業実行委員会(※)、中村まさあき

石橋が残る地域文化を発信



通水管の漆喰の詰め替え作業が行われている通潤橋=2017年9月、山都町



左)人形遣いについて説明する「清和文楽人形芝居保存会」メンバー。中)清和文楽の人気演目「雪おんな」のひと幕。右)浄瑠璃を語る太夫と音で物語りを演出する三味線

地域の伝統文化を披露

17日(1日目)午前中は、午後の開会に先立つエキスカッション(体験型イベント)として、希望者による石橋フットパスが開催された。参加者は熊本地震による被災後、復旧工事を終えた美里町の「二俣福良渡目鑑橋」などを歩いた。

全国石橋サミットは、九州で唯一の「人形浄瑠璃専用劇場「清和文楽館」(山都町)などを会場に開催された。オリエンテーションの後、「石橋の未来を語る」と題し、熊本大学熊本創生推進機構政策創造研究教育センター准教授の田中尚人氏がコーディネーターを務め、次の4人のパネリストによるパネルディスカッションが行われた。

パネリスト▽片寄俊秀氏(元長崎総合科学大学建築学科教授および関西学院



主催者を代表してあいさつする梅田穰・山都町長(※)



パネルディスカッションの様子。左から田中尚人准教授、片寄俊秀氏、尾上一哉氏、下田美鈴氏、岸本竜彦氏(※)

大学総合政策学部教授で元日本の石橋を守る会会長)▽尾上一哉氏(尾上建設代表取締役社長および「社」石橋伝統技術保存協会理事長で会員)▽下田美鈴氏(山都町女性の会連絡協議会会長および元山都町立図書館長で会員)▽岸本竜彦氏(山都町浜町の料理店「本まつまや」7代目店主で山都町中心市街地活性化協議会実行委員長)

18日は、山都町に江戸時代から伝わる農村芸能「清和文楽」の創作人形芝居「雪おんな」のひと幕の披露の後、熊本地震で被災した通潤橋の復旧工事の状況について、山都町教育委員会の西慶喜学芸員から説明があった。

「通潤橋は今も農業用水路の一部施設で、通水を維持するために地元土地改良区の人々による管理が継続されてい

る「生きている文化財」と、その特異性を指摘。①外側にはらみ出した上部壁石の積み直し②漏水の原因であるはがれた石管目地の漆喰詰め替え③通水管の一部である木管の取り替え④石管下の亀裂が入った赤土タタキの修復—などの修復作業が行われていることを説明した。

「石橋のある未来を語る」

その後、1日目のパネルディスカッションを総括して、田中准教授が次のように報告した。

2016年4月の熊本地震と、その後に起きた豪雨被害を踏まえ、「復旧までは行政の仕事、その後は市民が主役にならなければ復興は進まない。創意工夫をして、石橋を守るだけでなく、石橋の文化や田畑と地域の暮らし丸ごとを守っていかねば意味がないこと」を話し合った。

そして、各パネリストの発言の要旨を次のように紹介した。

片寄氏は「かつて長崎で経験した長崎大水害(1982年)のときには、文化財を守るなど二の次で、まずは生命の安全と利便性の確保が優先された。それが熊本地震では文化財を復旧することがトップニュースになり、修復技術が賞賛されるまでになっている。緑川流域の方々の石橋への熱い思いが届いたよ

うだ」と、35年前を振り返った。

下田氏は、通潤橋の通水のための石管の破損した漆喰の詰め替え作業を、地元の土地改良区の皆さんが行っていることに関し、「漆喰の詰め替え作業のような技術は、一度失われると戻すことができない。これを継承していくことが大事」と訴えた。

岸本氏は、地域を活性化するために「自分の言葉でふるさとを話せる若者、おもてなしができる大人、山都町のことを発信できるデザイナー、人をつなぐコーディネーターの役割ができる4人が必要」と述べた。

地元で石橋技術者の養成事業を進める尾上氏は、「早く安く良く、本物」ができるわけがない。創ろうとした目的も含め、本物が何かを見極められる人材を育てていきたい」と、石橋技術者養成への意気込みを語った。

最後に田中准教授は、「かつて通潤用水と通潤橋架設に力を尽くした布田保之助は、石橋を架けて地域が豊かになることを目指した。その思いは、創造性、協調性、不屈の精神、勤労の喜びを表す『通潤魂(つうじゅんこん)』という言葉で地元の県立矢部高校の校訓に受け継がれている。この思いは郷土愛につながり、それこそが、地域が豊かになるために大切なことである」と語り、総括報告を締めくくった。



姜尚中氏による記念講演が行われた

石橋文化を後世に

総括報告の後、主催者を代表して山都町長の梅田穰氏、来賓の中から熊本県副知事の小野泰輔氏、県議会議員の増永慎一郎氏があいさつを行い、石橋サミット宣言を採択した。

最後に姜尚中氏が演壇に立ち、「くまもと未来創造く石橋文化を後世に」と題した記念講演を行い、地域の文化や景観を守ることの重要性について、次のように語った。

「文化は生きている。文化は保存するとともに新しい命を吹き込む必要がある」。文化を守るには、「住民が自分の生きる場所に誇りを持つことが重要で、文化財を産業と結びつける発想や、内と外の合力」が必要になる。また、「景観は精巧な有機体のようなもので、歴



石橋フットパスで訪れた「二俣福良渡目鑑橋」(美里町)(*)

史と伝統の中に息づいている。石橋には造った人だけでなく、それを利用してきた人たちの思いもあり、あるべきところにあつて景観を形成している」。そして「景観には、今を生きる人々の思いが反映される。だから人々の思いが崩れると景観も崩れる」と指摘。「文化財だけでなく、生きた景観を守りながら、外から来た人たちが根を下ろせる地域づくりを進めてほしい」と、石橋が多数架かる緑川流域において、全国石橋サミットが開催されたことへの意義を語った。

石橋サミット閉会の後、希望者は「緑川流域石橋探訪バスツアー」や「石橋フットパス通潤橋周辺コース」にそれぞれ参加し、緑川流域の石橋のある景観を楽しんだ。(次面につづく)

石橋が心の復興のシンボルに

1973年のこと。私たちは「中島川を守る会」を立ち上げ、当時は悪臭を放っていた川でごみ拾いを行い、春の「中島川まつり」を発明するなど、川の魅力を取り戻す活動を展開しました。その一方で、水害の予測と対処方法を模索していたのですが…。1982年7月、あの長崎大水害で、長崎市内を流れる中島川に架かっていた石橋のうち6橋が流失し、「眼鏡橋」「袋橋」「桃溪橋」の3橋が大きく損壊しました。(S)

「全国石橋サミットinnくまもと」で初めて語ったこと

第2代会長 片寄 俊秀(大阪府)

「柔構造都市」提唱するも

ところで私は、あの眼鏡橋

復旧で川の両方の護岸に暗き

よ(河川バイパス)を設けたのには賛成

していません。浸水被害を及ぼしたの

は、実は中島川ではなく、眼鏡橋近くの

より低いところを流れる、ししとぎ川の

氾濫でした。それでも県は、中島川の改

修事業をやりました。行政としては、そ

こに事業をつくるしか、お金を生む方法

が無かったからでしょう。

石橋は本来、洪水時に流れても、また

中島川石橋群の災害復旧工事が終わり、その完成の祝いでは、市民が眼鏡橋を染め抜いたそろいの浴衣姿で、「中島川音頭」に合わせて踊ったときは正直、驚きました。

「全国石橋サミットinnくまもと」でそのときの写真を紹介したところ、山都町の方から「通潤橋が完全復旧したら、浴衣で踊ろう」という声が聞こえました。やはり復興には、心の復興を支えるシンボルが必要なのだ、あらためて思いました。



上資料は長崎大水害後の新聞報道。下は中島川石橋群の復旧工事完成記念イベントの様子
資料・写真提供/片寄俊秀

積み直せばいいのです。それが自然だと思っています。それにより、石工の技術も受け継がれるし、復旧過程そのものが結構、興味深い観光資源にもなります。全国からお金も集めて…(笑)。

長崎はかつて、ギリシタン向けに無理矢理造った、谷間と埋め立て地だけの港町です。もともと水害危険性の高い都市なので、洪水を完全に防ぐことは難しい

がされ、港内の埋め立ても進みました。今後、長崎大水害クラスの集中豪雨に見舞われたら、また同じような、ひよっとすると、より大きい水害が起こります。長崎は河口部が閉塞しているので、港に注ぐ水が膨れ上がると思うのです。

石橋の保存・活用へ

それでも、眼鏡橋だけ何とか残ったのは、ちよつど時代の変わり目だったからだと思います。市民も、まちのシンボルや観光資源の大切さを意識するようになり、行政の姿勢も変わりました。今回のサミットに参加して、あのとぎの長崎の経過が後に、全国に大きな影響を与えたことを、あらためて知りました。

今回のサミット参加に

つながったのは、一元山都町立図書館長の

下田美鈴さんとの縁です。「日本一の石

橋文献を所蔵したい」というお考えを聞

き、集めた書籍などを寄贈させてもらい

ました。図書館の石橋関連蔵書のうち、

私からの寄贈本が半数以上になると思

います。日本はもちろん、中国、韓国、ヨ

ーロッパなどの石橋の本もありますの

で、山都町を訪れてご覧ください。

当時の新聞は、被災した中島川石橋群の復旧を望む市民の声を、「景観が生活道か」という見出しで報じました。「人命」と「文化財」のどちらを優先するか、という考え方が常識だったのです。ある人からは「みんなが生きるか死ぬかと必死なときに、石橋を復旧するなんてんでもない」と言われました。

実は私も胸の奥で、無理かな、と思った時期もありました。それでも科学的な調査をし、市民の皆さんと学生も巻き込んで、相当激しい運動をやりました。孤立を恐れずに頑張ったつもりです。

昨年5月の第38回総会において、新たに河村修氏が副会長（総務部長兼任）に選任された。これまでも総務部長として尽力されてきた河村氏に、副会長就任の感想を聞いた。（広報部）

石橋を次世代に引き継ぎたい

副会長 河村 修（熊本県）

日本の石橋を守る会のまだ設立前、地元である熊本県山鹿市の「湯町橋」と「大坪橋」が河川改修による移転・復元が必要になり、山口祐造氏（初代事務局長、故人）からご指導をいただきました。それが縁となり、1981（昭和56）年、山鹿市での本会設立総会に

「肥後種山石工技術継承講座」は

「肥後石橋技術者養成講座」へ

熊本・山都町の文化遺産総合活用推進事業の一環として2011年度に開講した「肥後種山石工技術継承講座」は、16年4月の熊本地震発生により状況が一変した。震災後は、数多くの石橋の修復事業が発生し、実習担当講師が不足する事態に。そこで昨年6月、本会理事会を開催して事業中止を決めた。

しかし、受講を熱望する人たちがいたため、世話役の尾上一哉・技術部長が一般社団法人石橋伝統技術保存協会を設立し、昨年8月から石橋の修復現場で受講者が研さんを積む「肥後石橋

つながりました。

以降、歴代の役員や会員の方々のご尽力により、多くの石橋が残されてきたことは、会員の皆さまもご承知の通りです。一人の力は微力であっても団体になれば、大きな力が発揮できると思います。

石橋は、貴重な文化遺産であり、観光資源としても地域の活性化に重要であるとの認識が県や市町村、住民の間に根付いてきているように思います。

石橋を次の世代へどう引き継いでいくか、本会の永遠のテーマではありますが、会員相互の連帯により、さらにその輪が広がっていくことを願っています。

技術者養成講座」に事業を引き継いだ。

「公共機関が発注する石橋保存事業では、伝統技能に加え公共工事の専門能力を持つ技術者が必要です。そのため受講者の社会的身分を証明する団体の教育支援を受けてきましたが、被災石橋復旧には、さらに堅実な講座の支援体制が必要でした。今後も、日本の石橋を守る会をはじめ国や自治体、支援財団、企業や個人からのご支援を受け、健全な運営体制に移行します。本講座は、日本の石橋を守る会の目的の実現でもありと考え、今後も受講者のさらなる資質の向上を目指していきます」と尾上部長は語った。（広報部）

訃報 森野秀三さん(滋賀県)が逝去

滋賀県会員の森野秀三氏が昨年9月19日、逝去された。

「石橋が多くのの方々話題に上る機会となればうれしい」

右は2014年3月発行の会報84号で、地域活性化に貢献する人を表彰する「文化・経済フォーラム滋賀」の「文化で滋賀を元気に賞」として、森野会員が石橋調査文化賞を受賞した際のコメントである。

森野氏は滋賀県出身。大津市の滋賀会館ギャラリーで写真展「日本の石橋展」を10年間にわたり毎年開催する中で、県発行の雑誌「湖国と文化」でも石橋と森野氏の活動を紹介する特集記事が組まれた。

その後は大阪府から滋賀県甲賀市に住所を移し、石橋の調査研究を続けた。県の観光展では森野氏が発案した「甲賀十三橋」企画展が催された。15年3月発行の会報86号でも紙面見開きで、滋賀県の旧甲賀郡（甲賀市・湖南市）の神社門前橋を巡る「甲賀十三橋めぐり」を紹介している。

近年は毎年、滋賀県立琵琶湖博物館（草津市）で石橋写真展を開催。それを地元の新聞やテレビが報道したことで注目を集めた。

琵琶湖博物館では施設リニューアル

を機に16年7月か

ら、森野会員の情報を基にした「石橋検索コーナー」が設けられ、検索結果を大型のディスプレイで確認できるようになった。（17年3月発行の会報90号で紹介）。このときは、「今後もさらに検索できる情報を充実させたい」とのコメントを会報に寄せていた。

また、ネット上で11年8月から「石橋探偵のブログ」を発信し、入院中を除き、ほぼ毎日のように更新し続けた。最後の更新は、亡くなる2日前の17年9月17日。岩手県花巻市花巻公園城内の「雲井橋」を紹介している。

「心臓と腎臓を患っておりましたが、全国の石橋（およびマンポ）を見たり、調べたりすることが生きがいとなっておりました」と兄の雄二郎氏が、本会事務局に訃報を知らせた。

「マンポ」とは水路や鉄道の下などに設けた小規模なトンネルのこと。滋賀県湖南市吉永にある「大沙川隧道（おおすながわすいどう）」が日本で最も古い石造トンネル（マンポ）であることを検証した功績は大きい。

ここに紹介した足跡は、森野秀三氏の活動のほんの一部に過ぎない。ご冥福をお祈りする。（広報部）



祝 大瀬橋架設100年

石橋を文化遺産として次世代に

福岡県八女市上陽町の3連アーチの石橋「大瀬橋」。2012年7月の九州北部豪雨により取付護岸や高欄などが被災したが、修復工事がなされ3月3日、八女上陽の「ひふみよ橋」を守る会が主催して、架設100年を記念するイベントが上陽町の大瀬橋と「ほたると石橋の館」で開催された。(広報部)

写真提供/久間隆行(※)、中村まさあき



大瀬橋前の河原での記念撮影。最前列中央が上塚尚孝会長(日本の石橋を守る会)。その向かって左側が久間一正会長(八女上陽の「ひふみよ橋」を守る会)。同右側が大瀬橋の石工頭領・萩本卯作の子孫である萩本勝子さん(※)



大瀬橋架設100年を祝う神事の玉串奉てん(※)

ひふみよ橋の「み」

福岡県八女市を流れる星野川(矢部川水系)には上流から順に、単一アーチ(ひ)の「洗玉橋」、2連アーチ(ふ)の「寄口橋」、3連アーチ(み)の「大瀬橋」、4連アーチ(よ)の「宮ヶ原橋」が架かることから、これら4橋は「ひふみよ橋」と呼ばれている。

2012年7月の九州北部豪雨では、山から大量の土砂や流木、がれきなどが川を流れ下ったため各橋は傷ついたが、流失することはなく、石橋の耐久性を実証した。

先人の思い共有したい

大瀬橋の架設は1917

大瀬橋 (だいぜぼし)

竣工 1917(大正6)年
形式 3連式石造アーチ橋
石材 阿蘇溶結凝灰岩(生駒野産出)
法量 橋長45.5m、橋幅3.7m、径間12m
請負人 川口竹次郎(八女郡下横山村)
石工頭領 萩本卯作(八女郡北川内村)
1975(昭和50)年に橋の路面を削り、幅員をコンクリートで拡幅。78年に下流側に隣接し鉄筋コンクリート製の橋が架設されている。

(大正6)年5月3日。八女上陽の「ひふみよ橋」を守る会(久間一正会長、会員数109人)は、この地に石橋を架けた先人の熱い思いを共有し、その文化遺産としての価値を見直し、次世代に残して行くための機会として3月3日、「大瀬橋架設100年記念・特別企画」イベントを開催した。

石工頭領の子孫も参加

午前の部は大瀬橋で行われ、開会式や神事、「100年記念橋渡り」などが行われた。神事では「星野川の清き流れの岸辺つるわし」と、吉田大神宮(同市吉田)の石川照朗宮司の祝詞(のりと)が

記念講演1 馬場 紘一氏 「種山石工と八女の石橋」



ばば・こういち
技術士(建築)、八女市景観審議会や八女市都市計画審議会、八女市文化財専門委員会の各会長

馬場紘一氏は、熊本種の種山石工と八女市に残る石橋とのつながりに関する調査・研究内容を披露した。

洗玉橋の要石には、「矢部吹上ヶ兄弟橋」「肥後上益城 八代種山 棟梁橋本勘五郎/倅源平/孫為八」の名が刻まれているが、橋の架設を検討する段階では、浮羽郡山北石工との比較検討がなされた上で、熊本の橋本勘五郎へ架設工事を依頼したことなどを紹介。

当時の設計書などから、要石に残る名のほかにも種山など肥後の石工9人が記されているという。その中にはこの地に転籍し、大瀬橋架設時は石工頭領を務めた萩本卯作(熊本県八代郡下岳村出身)もいた。

萩本卯作は、鮎尾橋(上流と下流側をコンクリートで拡幅)、枕橋、須賀神社の狛犬、玉垣や石垣など、北川内公園の「軍艦山」と呼ばれる石垣、室園神社の鳥居、紫尾天満宮の鳥居や石垣も残したことなど、馬場氏は画像とともに分かりやすく紹介した。



「100年記念橋渡り」の様子(＊)



「石橋探訪」で須賀神社を訪れた参加者(＊)



和太鼓「童衆」が熱いパフォーマンスを繰り広げた



大瀬橋を描いた苦心の作、ジグソーパズルを披露

始まり、「100年前、洪水のたびに木の橋が流され、ために村人、村民たちが『洪水にも流されない耐久性のある石橋を造ってほしい』との熱意で浄財を出し合い、その熱意が役所を動かし、勘五郎が教え、育った八女石工集団により、大正6年に竣工した」と奏上された。

「勘五郎」とは、この地に招かれ、1893(明治26)年に「洗玉橋」を架けた熊本の種山石工頭領、橋本勘五郎。その弟子で、種山出身ながらこの地に残り、後に大瀬橋を架けた石工頭領が萩本卯作である。

この記念の催しには、本会

から上塚尚孝会長や河村修副会長、軸丸英顕・事務局長、上妻信寛・景観保護部長、上塚寿朗・会計担当らのほか、萩本卯作の子孫、萩本勝子さんも参加した。

種山石工の技術が残る

午前の部ではその後、技術士(建築)で八女市景観審議会会長や八女市都市計画審議会会長などを務める、馬場紘一氏が案内人となり「石橋探訪」が行われ、町内の大瀬橋や枕橋、北川内公園の「軍艦山」と呼ばれる石垣や室園神社、寄口橋、洗玉橋の高欄によく似た玉垣が施された須賀神社などを巡り、萩本卯

作と八女石工の足跡をたどった。

石橋保全へ市に要望

午後の部はまず「ほたると石橋の館」のウッドデッキで、地元で人気の和太鼓「童衆」による力強いパフォーマンスが披露され、会場が熱気を帯びた。

続いて、八女上陽の「ひふみよ橋」を守る会の小井手恒則・事務局長が12年以降の活動報告を行い、15年には「ひふみよ橋」の八女市文化財指定と保全を求める要望書を市に提出したことや、16年から毎年、手製の「ゴンドラ」を使って洗玉橋の除草作業を行っ

ていることなどを報告。原口昌宏監事は、石橋に親しみをもってもらおうと作製した、木製のミニ輪石や大瀬橋が描かれた特大サイズのジグソーパズルを紹介した。

その後は2人の講師による記念講演が行われ、まず「種山石工と八女の石橋」と題し馬場紘一氏、次に「石橋は『地域の宝』」と題し、工学博士で熊本大学大学院シニア教授の山尾敏孝氏がマイクを握った。

最後に立石三義理事が閉会のあいさつを行い、「先人が残した貴重な文化遺産である石橋を大切にしていきたい」と締めくくった。

記念講演2 山尾 敏孝氏 「石橋は『地域の宝』」



やまお・としか
工学博士、熊本大学名誉教授、熊本大学大学院シニア教授、熊本大学デジタルアーカイブ室長

山尾敏孝教授は講演前半で、石橋の強さを実証する各種の実験について説明。壁石と中詰め材がある模型では、石橋は地震などの揺れに強いこと、特に壁石が石橋の強度に重要な役割を担っていることを強調し、「作用荷重が伝達できるよう、施工の際はしっかりと輪石を組むことが大事」と指摘した。

後半は、地震と洪水による石橋の被災状況の違いについて紹介。石橋を守っていくため次の提案をした。

▽石橋の健全度を地元住民が評価できる石橋点検マニュアルの活用▽石橋の補修や補強ができる石橋技術者の養成▽石橋を文化財に指定する活動▽石橋を観光資源として活用するためのボランティアガイドの養成―など。

「自然災害から石橋を守る方策は、官民学が協力して検討する必要がある。本会の活動は重要である」と指摘。最後に「石橋の近くの住民が石橋を『地域の宝』として扱い、維持管理してほしい」と会場の参加者に呼びかけた。



八女公園内に移設保存 「本眼鏡橋」 福岡・八女市

架け替えのため2016年12月に解体。石材が保管されていた福岡県八女市の「本眼鏡橋」は、市立図書館隣の八女公園(同市本町)内への移設が決まり、今年3月に復元工事が終わった。

同橋は径間4・8m、橋幅1・8mの単一アーチ石造橋で、文化財指定はない。同市の本と呼ばれる地区の八媛病院前を流れる豊福川に架かり、約50年前と30年前の2度にわたり、アーチ橋を残したままコンクリートスラブ(床版)を用いた路面拡幅工事が行われ、約18・5m

石橋のまの風景

石原 史彦「霊台橋」
熊本県下益城郡美里町

小学校の教師になって2年目の秋だった。見学旅行の途中、バスの窓から初めて見た霊台橋の姿に感動した記憶が、今も鮮明に焼き付いている。どつしりとした重量感と、何もいえない美しいアーチの弧。見たのはほんの数秒だけだったが、私の心の美意識に確かに、しっかりと残っていた。その年の暮れ、ボータスをはたいて買った一眼レフカメラに、

その姿は収まった。

あれから30年。ふとしたことで石橋の絵を描くこと……。

アーチの付け根付近まで近寄り、下から見上げるようにして描いた鉛筆画の1作目。2作目はサインペンを使って、対岸の上から見下ろした構図で描いてみた。

橋の重量感を出すのに苦労した。

「虹の弧を陽に浴び染むる
霊台の石の匠の声を聴こゆる」
(2015年作品、サインペン画、文||石原史彦)

まで幅員が拡幅されていた。

橋梁点検の結果を受け16年、石橋を撤去して新橋に架け替える市の事業計画が浮上。それに対し、地域住民などは現地保存を市に陳情したが、石橋を残すと洪水流の障害になるため、移設して輪石のみ保存することに決まった。

工事では耐震補強のため、輪石にチェーンを巻いて固定する工法が採用された。これは桶(おけ)などに用いられる「たが」の原理を応用した試み。

八女市文化振興課の中川寿賀子・文化財保護係長は、「八女市には41橋の石橋が残ります。こうした先人の文化遺産を多くの人たちに見に来てもらえたら

と思っています」と来訪を呼びかける。

市は18年度中に移設についての案内板を設置するなどして周辺の整備を行う予定である。(広報部)



八女公園内に移築された本眼鏡橋。耐震補強のため輪石はステンレスチェーンで締められている
=2018年3月16日中村まさあき撮影

情報

第39回大会は熊本県玉名市で
2018年5月12・13日に開催

編集後記

熊本・山都町で開催された「全国石橋サミット in くまもと」の記念講演の中で姜尚中氏が語った、「景観には今を生きる人々の思いが反映される」との言葉が印象に残っています。石橋が残る風景は、そこで暮らす住民とよそからやって来る人との思いが重なり合うことで、維持されていくのではないのでしょうか。6・7面で紹介した福岡・八女市の「ひふみよ橋」なども、まさにその好例のように思います。

さて現在、熊本地震で被災した数々の石橋修復工事が進行しています。今回号では紹介できなかったため、時期を見て特集できればと思っています。

(会報担当 中村まさあき)

日本の石橋を守る会 ～石橋とその文化を大切に～

会報92号(通算) 2018(平成30)年3月31日発行

代表者 会長 上塚 尚孝
事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2
通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360
HP <http://www.ishibashi-mamorukai.jp>
BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>